

景気敏感株中心に底堅く推移するも、市場参加者は乏しく

2010年3月10日(水)

第一生命経済研究所 経済調査部
副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

欧米株は上昇一服感から上値は重いものの、総じて底堅く

欧米株式市場ともにほぼ変わらずでした。欧州では、ディフェンシブ株中心に底堅く推移したものの、銀行株が軟調でした。アナリストが英国の銀行について、新規制によってバランスシートの圧縮に迫られ、金利純収益が減少する可能性があるとの指摘したことなどが嫌気されました。また、金属価格の下落により鉱山株が弱かったことも相場の重石となりました。一方、米国株式市場は、素材やヘルスケア関連株が軟調だったものの、通信株が相場を支えました。ネットワーク機器大手が新型ルーター（ネット接続機器）を発表しました。同社は従来システムの3倍以上の容量のデータを伝送することが可能としており、通信料増加への思惑から他の通信株にも買いが広がり、相場を支えました。ナスダックは4日続伸し、2008年9月2日以来の高値を付けました。

一方、欧州圏における信用リスクは引き続き相場の重石となりました。英系格付会社フィッチが、ポルトガルの信用格付け見直しについて、現行の「ネガティブ」から変更する予定はないと改めて指摘したことなどから、ポルトガルをはじめとする欧州周辺国の国債利回りは上昇し、ドイツ国債との利回り差は拡大しました。また、英国についても格付け機関や一部メディアによって財政赤字問題に対する懸念が伝えられ、為替市場ではユーロやポンドが軟調となりました。欧州圏における財政赤字問題に対する懸念は、ギリシャ以外の国々にも波及し始めています。ただし、南アフリカ・ランドなどの資源国通貨は堅調に推移するなど、市場全体で見るとリスク回避の動きは徐々に和らいできているように感じられます。

材料難の中、S Qを控えて動きは乏しく

寄りに発表された1月のコア機械受注（船舶・電力を除く民需）は前月比▲3.7%と、ほぼ予想（▲3.5%）どおりとなりました。製造業は前月比+3.3%と前月（+17.1%）より減速したものの2ヶ月連続で上昇しました。精密機械（▲47.9%）が大きく低下しましたが、金属、非鉄、造船、紙パルプなど幅広い業種でプラスが目立ち、主力の電気機械や自動車工業も前月に引き続きプラスを維持しました。一方、非製造業（船舶・電力を除く）は鉱業、通信などが低下し、前期比▲12.9%と落ち込みました。非製造業の弱さは依然として目立つものの、製造業中心に下げ止まりを見せており、企業の設備投資は徐々に持ち直していくものと思われます。

国内株式相場は小幅高で始まりましたが、その後は大引けまで前日終値を挟んで方向感の乏しい展開でした。日経平均株価の日中値幅は40円程度にとどまり、明日の中国経済指標の発表や週末のS Q等を控えて値動きは限定的でした。東証一部売買代金は1兆円強と閑散としており、海外市場同様に材料難の中、市場参加者も限られました。先物のロールオーバーは順調に進み、前場は商いが膨らみましたが、後場に入るとその動きは細り、一巡感が漂っていました。銀行や自動車などの主力大型株や内需関連株の一角が軟調でしたが、前日同様、電機などの主力の外需関連株がプラスに寄与したほか、機械も後場から上げ幅を広げ、相場を支えました。

S Q算出まで動きにくい状況が続くことが予想されますが、景気敏感株中心に物色する流れが続いており、市場センチメントが改善する中、下値圧力は徐々に薄らいできているように感じられます。 以上